



◀診察に当たる赤荻医師。認知症家族の相談や診察は年々増加しています

認知症サポート医の
赤荻先生に伺いました

悩む前に知ってほしい

認知症の基礎知識と

介護に当たる家族の接し方

認知症は単なる老化現象ではなく、脳細胞がダメージを受けて起こる脳の病気です。脳細胞にダメージを与えるもので多いのがアミロイドβ^βといわれる異常タンパクで、次が脳卒中などの脳血管疾患です。前者によって起こるのが最も多いアルツハイマー型認知症、後者が次に多い血管性認知症です。その両方が同時に起こっている人もいます。認知症は脳の老化によるただの物忘れではありません。記憶だけでなく、物事の判断力や実行力も妨げられます。例えば、今の時間が分からなくなる、お金の数え方が分からなくなるなど、あるいは料理ができなくなるなどです。それが原因で、日常生活に支障を来すようになった状態が認知症です。認知症の初期症状は物忘れがひどくなった状態で、この状態を軽度認知障害と言います。

この状態を経てアルツハイマー型認知症に進む人が多いといわれています。最近では、初期症状の段階でアルツハイマー型認知症の診断ができる血液検査が開発されました。近い将来、早期に診断し、アミロイドβを溶かす新薬で認知症を治せる夢の時代が来そうです。今、もし家族が認知症になってしまった時に大事なことは、決して叱らないことです。子どもの場合は、時に叱ることも必要かもしれませんが、ただし認知症の場合、叱った意図が伝わらないため、できなかったことを叱られても理解できません。逆に、どうして自分が叱られるのかと怒ることになります。認知症になっても感情は損なわれないからです。その結果、問題行動といわれる困ったことをするような事態になってしまいます。そうならないためにも、認知症の人の言うこと・やることを否定せず、叱らずに見守ることが大切です。しかし、これでは毎日一緒にいる人はストレスが溜まってしまいます。そのためにも、介護保険制度を利用するなどして自分が休む時間を作り、心の健康を管理しながら、認知症の人とうまく付き合っていく方法を見つけましょう。

正しく理解しよう

認知症のこと、介護のこと

9月は「茨城県認知症を知る月間」です。認知症は誰もがかかる可能性のある病気。この機会に認知症について正しく理解しましょう。



古河福祉の森診療所
赤荻 榮一 医師

平成8年から古河福祉の森診療所の医師として勤務。専門は呼吸器科だが、内科外科を問わず全ての科の診療に当たり、さらになん患者・家族の会を主催するほか、認知症サポート医としても活動している



徐々に失われていく大切な人の名前や思い出。自身や大切な家族が認知症になったら…。高齢化が進む日本において、2025年には約5人に1人の高齢者が認知症になると見込まれています。また、介護が必要になった要因の中で最も多いのが認知症です。介護離職や精神的・肉体的な疲労など、介護する側の人にとっても多くの問題があります。誰もが関わる可能性がある認知症について、一人で抱え込まず、地域全体で向き合しましょう。

▶このマークは認知症サポーターの証です。詳細は、9ページをご覧ください

